

第六節 ゆり事情

日本のゆりが初めて海外に紹介されたのは正徳年間（一七一―一七二五）からで、もっぱら学者によって花ゆりが欧米に紹介された。

慶応年代から明治二十二年ころまでは、居留外人によってゆり根が貿易商品として輸出され、明治二十三年から日本人の手によって輸出が始まり、数多くの貿易業者が輩出し輸出額も増加した。大正の初期から昭和になり、外人経営の貿易商社は次第に影をひそめ、日本人貿易業者が盛大に貿易を営むことになった。

欧米諸国においては、キリスト教徒は十二月のクリスマス（降誕祭）と、四月上旬のイースター（復活祭）には必要欠くべからざるもので、すべて家庭では白ゆりを飾るようになった。切花・鉢植え・庭園、祭礼・葬儀など四季を通じて一般にも愛用されている。

以下、永良部ゆりのあゆみの主な事について、年次を

おつて記録をまとめることにする。

1 明治三十年（一八九七）

奄美大島名瀬村において、ゆりの取り引きが始まった。

名瀬において、横浜植木株式会社・新井清太郎商店・高木作太郎商店・田中幸太郎商店・ポーマ商会などが、当時、奄美大島海運を取り扱っていた名瀬村の池畑回漕店に依頼し、山野に自生しているゆりを採集させて買い入れたのが、奄美大島でのゆり取り引きの初めである。その後、高価で売られるようになった。

2 明治三十二年、三十三年（一八九九―一九〇〇）

① 沖永良部でのゆり栽培取り引きの創始者市来崎甚兵衛氏は鹿児島市に生まれ、明治二十三年名山尋常小学校卒業後、徳田豪商で商業の道に励み、後、帆船で沖繩と鹿児島や大阪間で黒砂糖や雑貨品等の輸送をしていたが、晩年和泊に移住して雑貨商を始めた。

本島の開拓と繁栄に心を砕いていた氏は、名瀬で山野に自生しているゆりが高価で売られているのを



市来崎甚兵衛氏



アイザック・バンデング氏

知り、ゆり栽培の有利なるを認め、自分から和字で栽培し、横浜百番館英国人アイザック・バンテングと三十五年から取り引きを開始した。これが沖永良部におけるゆり栽培の始まりである。

氏は爾来生涯の事業としてこれが経営に従事し、ついに沖永良部をして今日あらしむるの基をなした。

氏は背の低い横太りの方でしたが、厳格で商売には熱心な方だった。氏は大正十一年の秋、突然発病し、弟が迎えて大阪の子供宅へおつれし一年ほど介抱したが、老衰のため大正十二年九月二日、七十七歳で亡くなった。

その子孫は有名大学を卒業し成功している。手々知名、沖治氏の母堂は甚兵衛氏の長女である。

② 当時、市来崎其兵衛商店に奉公していた玉城の清

武新政氏は、玉城の大里宮元氏に名瀬ではゆりが高価で売られているとの話を伝えたので、大里氏は自生しているゆりを掘り取り、畑に栽培を始めた。

③ 同時期に、当時名瀬の大島裁判所で書記をしておられた土持綱義氏（二代目村長）が帰郷し、親戚である喜美留の伊地知季道氏に名瀬では野生のゆりが高価で売られているとの話を伝え、栽培を勧めたので、アング（喜美留集落の南西部）の山野に自生していたゆりを掘り取り栽培を始めた。喜美留でもゆり栽培が始まった。

3 明治三十四年（一九〇一）

和・玉城・喜美留を中心に盛んになり漸次全島に波及した。

4 明治三十五年（一九〇二）

① 横浜山手百番地に営業所を設置（百番館という）した英国人アイザック・バンテング氏の仕入主任伊沢九三吉氏が来島し、市来崎甚兵衛氏にゆりを買集めさせた。これがゆり取り引きの初めである。

② 大里宮元氏がゆり根を初めてお金にかえた。芋掘りザルの一杯で四十銭の大金を得た。当時、卵一個五厘もしない時代であった。

ユリ根が、ザル一杯四十銭で売れたとの話は、一両日中に島内一円にひろがった。大山のすそのをはじめ山野の自生ゆり採集は盛んになった。

5 明治三十六年（一九〇三）

ゆり栽培者も増加し、野生ゆりを掘り取って売る人も多くなった。喜美留ではキビルアングとして、国頭では国頭根太青軸として栽培された。ゆりの取り引きは相対取り引き（個人取り引き）であった。

6 明治三十七年（一九〇四）

横浜山手百番地に営業所を設置し、洋服のラシャ生地地の輸入やゆりの輸出をしていた英国人百番館主アイザック・バンテング氏が、横浜杉田村の伊沢九三吉氏仕入主任を同伴し、わざわざ来島して、市来崎甚兵衛氏にゆりの収集・出荷と栽培荷造りの指導をした。バンテング氏は熱心なゆりの研究家で荷造り輸送方

法については非常に工夫をこらした。輸送途中にゆりが腐敗したり、荷いたみをしたりして損害を受けることが少なくなかったので、バンテング氏はこれを防ぐ方法を研究し、甘蔗かんてい枯葉を充てん物として包装するとよいことを発見した。これは、今日までも一般に使用され重宝がられている。

バンテング氏は、ゆりの取り引き・栽培・荷造りなど熱心な指導者で、たびたび、取り引きには沖永良部に來られたという。市来崎氏のもとでゆりの仕事をしていた和字の林米武氏（武一氏祖父）宅に泊まり、食はただエビのフライだけをこのみ、外人の食事や寝具のことで非常に苦勞されたという。

バンテング氏は明治三十八年にいったん英国に帰り、ふたたび来日した。多年に渡って多量のゆりを取り扱い、息子のアンネス氏に譲ったが、昭和二年の取り引きを最後に由緒ある百番館を閉鎖し、カナダに移住したという。ゆりの取り引きは相対取り引きであった。

7 明治三十八年（一九〇五）

特に、喜美留・和泊・玉城・和においてゆりの栽培および鱗片栽培りんぺんが盛んになった。栽培も思い思いの栽培で、取り引きも相対取り引きであった。

8 明治三十九年（一九〇六）

ゆりが栽培され増産されたので、横浜植木株式会社・新井清太郎商店・田中幸太郎商店・高木作太郎商会・百番館主アイザック・バンテング氏・ポーマ商会・二八館等各商社の出張員が来島し、ゆりの取り引きを始めた。生産者は少しでも売買価格の高い商館に売り、取り引きは自由取り引きで、商社は競争買いであった。

9 明治四十年（一九〇七）

① 大島郡農会が横浜輸出商社とゆりの一手販売契約を結んだ。三カ年はその契約を履行したが、不正取り扱いや損害を受けたので、生産者は大島郡農会からはなれた。

明治四十四年横浜輸出商社との契約を廃止した。

② ゆりの寸法取り引きによる建値取り引きが始まった。

た。

③ 寸法取り引きと建値

六寸―二銭 七寸―四銭 八寸―六銭
九寸―八銭 尺以上―十銭五厘

④ 一定した品種でなく混種のため、優良種系統選抜が始まった。

⑤ 鱗片繁殖が盛んになった。

② 取り引き価格

六寸―一銭八厘 七寸―三銭四厘
八寸―四銭五厘 九寸―六銭

13 明治四十四年（一九一三）

取り引き価格

六寸―一銭 七寸―二銭 八寸―三銭
九寸以上―四銭

今年は価格が値上がりした。

10 明治四十一年（一九〇八）

取り引き価格

六寸―一銭五厘 七寸―三銭 八寸―四銭五厘
九寸―六銭 尺以上―七銭

14 明治四十五年〓大正元年（一九一四）

① 取り引き価格

六寸―一銭三厘 七寸―二銭八厘
八寸―四銭 九寸―五銭

② 需要も伸び価格も良くなった。

11 明治四十二年（一九〇九）

① 取り引き価格は前年と同価格とする。

② 畑栽培が盛んになった。

12 明治四十三年（一九一〇）

① 取り引き商社が本格的に畑栽培を奨励し、優良種系統選抜増殖が盛んになった。